

煌びやかな王宮の廊下を全速力で走っていた。お母さんが今日のためにしらえてくれた、亜麻色のスカートがはしたなくなびく。

（足の不自由なおばあさんを助けてたら、こんな時間になっちゃった！ 時間ギリギリなんだけど!?）

私はミウ。年に一度しかない聖女試験を受けるため、王都から馬車で半日以上はかかる田舎からやってきた。

この国で、聖女は特別な存在とされる。そんな存在を選定する聖女試験とは、この国で魔力を持って生まれた女性だけが受けられる、癒しの力の選定試験だ。合格した聖女たちは教会に所属し、魔物との戦いが絶えない最前線へと赴いて、傷ついた騎士たちに魔力を注ぐ。聖女がいるかいなかで戦場の生存率がまるで変わると聞くから、その存在はこの国にとって本当に大切なものだ。

そして聖女になれば、身分が保障され、毎月使い切れないくらいの給金をいた

だける。病弱な弟の治療費を稼がなければならない私にとって、それは何よりも重要なことだった。

（だから絶対に、遅刻するわけにはいかないのに……!!）

「急げ急げ〜！ 時間に間に合わなくて落選なんて冗談じゃな……、つきや!？」

廊下の角を曲がった瞬間、何か硬くて大きなものに正面からぶつかった。石壁に激突したのかと思ったが、違う——温かい。それどころか、ふわりと大きな何かに包まれるようにして、身体が止まった。

鼻腔をくすぐったのは、革と、鉄と、かすかに混じったサンダルウッドに似た香り。

（……人、だ）

首を大きく上に傾ける。それでもまだ足りない。もつと傾けて、ようやく顔

が見えた。

陽の光を柔らかく纏ったような金色の髪。そして、エメラルドのように鮮やかな緑の瞳。

白いマントを羽織った騎士だった。胸元には見たことのない紋章。長身で、肩幅が広くて、自分がぶつかつたとき相手がびくともしなかつた理由がわかつた気がした。

「お嬢さん、大丈夫だったか？」

低くて落ち着いた声が降ってくる。

「はい！ 前を見ていなくてすみません。……ああつ、ちよつと待ってください」

彼が身体を離そうとしたので、ぐいっと腕を掴む。右肩のマントの端が、ぶつかつた拍子にひっくり返ってしまっていた。このまま行かせるのは、なんだか

気になる。

「よいせ……つと。お兄さん背高いですねー」

背伸びをして、めくれた端を引っ張り、留め具のそばに沿わせてきっちり直す。

「マント乱れちゃったので直しておきました！」

「え、あ、ああ……。ありがとう」

面食らったように、エメラルドの瞳が少しだけ見開かれた。

そのとき彼の背後から、ひゅつと息を呑む音がした。彼の鍛え抜かれた体躯のせいで見えなかったけれど、彼の後ろには同じ紋章のマントを着けた男が二人いて、その人たちが顔を真っ青にしてこちらを見ていた。口が開いたり閉じたりしている。

（……あれ、この人もしかして偉い人？ ……で、でもマントが乱れていたんだ

もの！)

深く考えて行動したわけじゃなかった。乱れているものが目に入ったから直した、それだけのこと。急いでいることも忘れて手を伸ばしてしまったのは、まあ、習性みたいなものだから仕方がない。

彼の後ろの人たちが一歩前に踏み出して何かを言おうとしたのを、彼が腕だけで制する。

そのあと、彼の形の良い唇がふつと弧を描いた。今度はもう面食らった様子もなく、どこか楽しそうな色の笑みを浮かべてこちらを見つめてくる。

(……なんか、じつと見られてる？)

「つて、ああ！……すみません、私もう行かなくちゃ！」

「聖女試験の会場はそっちじゃない。突き当たりを左だ」

え、と振り返ると、金髪の騎士は顎でくいつと廊下の奥を示した。

「……へ？ あ、そうなんですね！ 危うく迷子になるところでした！ ありがとうございます」

「またあとでな」

（またあとで……？）

首を傾げる間もなく、足が先に動いていた。このままだと本当に遅刻してしまふ。走り出しながら、なんとなく声のした方を振り返る。

金髪の騎士はまだこちらを見ていた。楽しそうに、ずっと。その表情に見惚れてしまいそうになったけれど、いけないとかぶりを振る。

（私は絶対に、聖女試験に合格しなきゃいけないのよ！）

私はすっかり乱れた呼吸を落ち着かせながら、他の聖女候補たちの間に並んだ。

大きく息を吸い込むと、両側から花のような甘い香りがする。横目でちらりと左右を見ると、さらりと流れる美しい髪、仕立ての良い上品な衣装、光を受けてきらりと揺れるアクセサリ。一方の私はここまで走ってきたせいで元々癖つ毛だった髪はさらに乱れ、どこかに引っかけたのかお母さんが丹精込めて縫ってくれた服の飾りが一つ、いつの間にか取れてしまっていた。

（なんだかすごく場違いな気がする……）

落ち込みかけたけれど、首を振る。何度も試験を受け続けて、ようやくたどり着いた聖女試験の最終選考。ここで弱気になるわけにはいかない。脳裏に、ベッドの上で一日の大半を過ごす弟レオの顔が浮かぶ。いつだって眉を下げて「お姉ちゃん、無理しないで」と言う、心優しい笑顔。

（いや、私は私を信じよう！　レオのためにも、私は聖女試験に受からなくちゃいけないの！）

「では、これより聖女試験最終選考を開始する。本日の検査は魔力量の測定。検分役は、王国騎士団長、シグルド卿がつとめられる——」

「はい」

(……え?)

壇上上がった人物に、思わず目が釘付けになった。金色の髪が、高い天井から差し込む光を受けて輝いている。白いマントがひらりと翻った。さつき私が直したばかりの、あのマントが。

彼は居並ぶ聖女候補たちに向き直り、そして一瞬だけ、こちらに視線を寄越してにこりと微笑んだ——気がした。

次の瞬間、周囲からほうつと熱を帯びた吐息が漏れた。声にかそならぬけれど、隣に並んだ候補者たちの頬が一樣にうつすら赤くなっている。式典の最中だから誰も声には出さなければ、その場の空気が甘く浮き立つのがわかつ

た。

「シグルド様だわ……」

「今日も本当に素敵……」

「シグルド様の目の前で試験だなんて、緊張してしまうわ……」

そんなひそひそ声が、周囲からじわじわと耳に入ってくる。私はぼかんとしたまま、その声を聞くともなく聞いていた。

（騎士……団長……？）

騎士団といえば、この国の治安と秩序を支える最高の武力組織だ。魔物の討伐から国境の守備、王族の護衛まで、その仕事は多岐にわたる。そしてその頂点に立つ団長職は、単なる軍の上官ではなく、国王から直接任命される王国随一の剣士——つまり、庶民が一生かけても関わることのない雲の上の存在である。

——その人に。

私はぶつかった挙句、腕を掴んで、まるで弟の服を直すみたいにマントを整えてしまった。

その事実がじわじわと染み込んでくるにつれ、顔からすうっと血の気が引いていく。

（どうしよう……！ 不敬罪で落選とかないよね！？ というか落選どころか……？）

「では次、聖女候補——よ、壇上へ」

「はい」

私がぐるぐると考えている間に試験は粛々と進んでいく。聖女候補が一人ずつ壇上に上がり、シグルド団長が掲げる水晶の前に手をかざす。すると水晶がじわりと光を帯びはじめ、数秒、十数秒と輝き続ける。最終選考まで残った候

補者ばかりだからか、不合格の声はなかなか出ない。これはもう、確認のようなものなのかもしれないかった。

「ふむ、申し分ないな。合格」

「……！　ありがとうございます」

そうして次々に合格の声が上がっていく中、私の番がやってきた。

「では次、ミラ殿」

「……はい！」

息を大きく吸い込んでから返事をして、壇上へ上がる。シグルド団長の目の前に立つと、改めてその背の高さに気づく。ちらりと顔を見上げると、頑張れともいうように、エメラルドの瞳が静かに細められた。

胸がとくとりと跳ねる。

気のせいだ、と首を振って、水晶に向き直る。両手をかざすと、水晶が――

一瞬だけ、まばゆく光った。それだけだった。息をつく間もなく、すぐに光は消えた。

（……あ、あれ？）

「……ふうむ。もう一度かざしてみてください」

「……は、はい！」

慌ててもう一度手をかざす。結果は同じだった。一瞬光って、消える。

私はあまりの居た堪れなさに俯いた。周囲から「なんでこんな子が聖女候補に？」「やつぱり田舎者は……」という声が聞こえてくる気がする。

（レオ……）

頭に浮かんだのは、弟の顔だった。今日の結果を待っているであろう、あの穏やかな笑顔。ここで終わったら、どうすればいい。

「……残念じゃが、ミラ殿は不合格じゃな。これにて最終選考を——」

「少々、よろしいですか」

凜とした声が、老魔法使いの言葉を静かに遮った。

ぱつと顔を上げる。シグルド団長が一步前に出て、老魔法使いに向き直っていた。

「この娘を、私の世話係として預からせていただけませんか」

「……え？」

ざわ、と周囲がどよめく。私も含めて、その場にいる全員が同じ顔をしていると思う。

「合格された聖女候補の皆さんは、これより教会での研修が始まります。——ところで、一つお願いがあるのですが」

シグルド団長は声のトーンを少し落として、続けた。

「最近の魔物の活性化に伴い、氣志團の遠征が増えまして。私自身の執務も煩

雑になる一方で、身の回りの世話から雑務まで任せられる者を探していたんです。魔力量は問題でも、聖女としての素養——誠実さや、人への目配りは、今日の目で確認しました」

最後の言葉で、エメラルドの瞳がちらりとこちらに向いた。先ほどの廊下での出来事のことを言っているのだと、すぐにわかった。

「ま、まあ……。この国最強の王宮騎士団の団長殿が言うのであれば止める者などおりますまい……。ですが、本当によろしいので？」

シグルド様は頷いてから、私に向き直った。

「ミラ嬢、給金と住まいはこちらで用意する。……それでも構わないか？」

どうしてこの人が、見ず知らずの私にそんな提案をしてくれるのか、正直まだ飲み込めていなかった。ただど弟の治療費を稼がなければいけない私にとって、渡りに船の提案であることには違いなかった。

胸いっぱい息を吸い込んで、背筋をまっすぐ伸ばす。

「ぜひ、よろしく願います！」

そうして、聖女になるために王宮に来たはずの私は、なんの因果か、この国最強の騎士団長の世話係として雇用されることになったのだった。



「団長、失礼します」

私は夕食をトレイに載せて、団長の自室の扉をノックする。

「入ってくれ」

ガチャリ、と扉を開ける。まず私の目に飛び込んできたのは、床に落ちた上着。それから少し離れた場所には手袋。さらにその先には靴下。まるで道しる

べのように点々と続くそれらを目で追っていけば、自然と部屋の奥へと視線が誘われる。たどり着いた先——窓際のロッキングチェアに、団長はゆったりと腰掛けていた。長い足をクロスさせ、頬杖をついたまま読書に勤しむその姿だけを切り取れば、完成された芸術品のようなだった。

（……部屋さえ散らかっていなければ、ね）

団長のお世話係として働き始めて、数日が経つ。その短い間に、色々とかかったことがある。

団長は片付けというものをしない。苦手、というより、使ったものをその場に置いていくことに何の疑問も持っていないようだった。脱いだものは床に、読み終えた書類は椅子の上に、飲みかけの水は窓際の台に。朝に私が綺麗に整えても、夜にはまた同じ状態に戻っている。

私はサイドテーブルに二人分の食事を一旦置くと、床に散らばった彼の衣服を

拾い集め始めた。自分のものより一回りも二回りも大きいそれらを腕に抱えながら進めば、点々と続く「道しるべ」に沿って、自然と窓際の団長のもとへとたどり着く。

「もう、脱いだものくらい自分で片付けてください。ちゃんとカゴも用意してありますよね？」

厚みのある上質な絨毯に膝をついて、椅子の足元に転がっていた靴下を拾いながら見上げると――なぜか、団長が嬉しそうな顔をしていた。

「ああ、いつもありがとうございます」

「……もう」

真正面からそう言われると、返す言葉が見つからなくなる。こんなふうにな直にお礼を言ってもらえると、ついつい相手が雲の上のお方だということを忘れてしまう。――いや、それは多分、団長のこういうところが弟のレオに少し似て

いるせいだ。世話を焼いても煩わしそうにせず、素直に受け取ってくれるところが。だから、つい口が滑る。

私は洗濯物をカゴに放り込むと、二人がけのテーブルに白いクロスを広げた。スープが冷めないうちにと椀を並べ、焼き立てのパンをかごから取り出し、二人分のカトラリーを丁寧揃える。窓から差し込む夕陽が、その一つ一つを優しく照らしていた。

「おお、今日はシチューか。……こっちは？」

団長が本を閉じてこちらに向かってくる。背後から影が差したと思った瞬間、上から声が降ってきた。彼は私の肩越しに身を乗り出すようにして、小さな鉢に目を向けている。

「かぶの甘煮です。田舎ではよく作っていたんですよ。団長、家庭料理を食べてみたいとおっしゃっていたので」

「ほう、それは楽しみなな」

団長が席についたのを確認して、私も向かいの椅子に腰を下ろす。きっとこの光景を見たら、王宮の方々は目を丸くしてしまうだろう。騎士団長と世話係が、向かい合って夕食をとっているのだから。

私も最初は固辞したのだが、「一人で食べるのは味気ない、俺に付き合ってくれ」と団長がどこまでも真顔で言い張るので、根負けして今の形に落ち着いた。

「あー……、あったかい味だなあ。よく家でも作ってたのか？」

「はい、弟は病弱ですし、母はいつも働いてましたから。料理は昔から私の担当だったんです」

「そうか」

団長はしばらく黙って咀嚼してから、ぽつりと言った。

「貴族相手のどんな晩餐よりも、お前の飯が一番美味しいな」

その言葉に、心がふわりと温かくなる。それからも団長はうまいうまいとシチューやかぶの甘煮を食べ進めた。そんな様子を眺めていると、私はふとあることに気づく。

「……団長？ それ……」

残り少なくなったシチューの椀の中に、明らかに緑色のものだけが取り残されている。ブロッコリーが、こんもりと。

「ん？ どうした？」

団長はやたらと綺麗な笑みを浮かべて私を見た。どこか誤魔化すような、取り繕うような——そうだ、この顔は脱いだ服を散らかしていたのを咎めたときと同じだ。

「……もしかして団長、ブロッコリーも苦手なんですか？ この前はにんじん

も残してましたよね？」

団長はしばらく私を見てから、ゆっくりとフォークでブロッコリーをひとつ刺した。

「……食べさせてくれるなら、食べる」

「え？」

「あーん♡」

その綺麗な笑みを貼り付けたまま、フォークをすつと私に差し出してくる。きつと貴族のご令嬢がこの顔を見たら、それだけで倒れてしまうだろう。私だって、一瞬だけ、ほんの一瞬だけ、心臓が跳ねた。

「だ、だめです！ 自分でちゃんと食べてください！」

「食べさせてもらえたら食べる」

「子どもみたいなことを言わないでください！」

動揺を押し込めて団長の手を掴み、フォークを押し返そうとする。けれど団長はびくともしない。にこにこ笑いながら、じつと私の顔を見ている。

（……こ、この人は……！）

レオだつて好き嫌いはあつたけど、こんなひどくはなかった。私はぐつと息を呑んで、渋々フォークを受け取った。

「……一回だけですよ」

「ああ」

できるだけ事務的な顔を作つて、団長の口元にブロッコリーを差し出す。団長はそれをゆつくりと口に含んで、もごもごと咀嚼した。不服そうな顔は相変わらずだ。

（もう、子どもみたいなんだから……）

苦手な野菜をしかたなく飲み込もうとしている、この国最強の騎士団長様。

そのあまりにも情けない横顔に、私はたまらずに吹き出したのだった。



そんな騎士団長様のお世話係になつて、早くも一ヶ月が経とうとしていた。

私はいつものように、外がうつすらと白み始める頃に目を覚ます。天井を見上げて一つ大きく伸びをしてから、顔を洗い、髪をまとめ、エプロンを結んで部屋を出た。

23

厨房で簡単に作った朝食をトレイに載せて、私は最上階の団長の私室へと向かう。

「……団長、失礼します」

コンコン、と上質な木の扉をノックする。いつものごとく返事は返ってこな

い。朝はいつもこうだ。私はもう慣れたように「開けますねー」とだけ一応声をかけてから、ガチャリと扉を開けた。

室内には昨晚の残骸が点々と続いていた。入り口近くに靴下が片方、その先に着、椅子の背に無造作に引つかかったシャツ。私はそれらを一つずつ拾い集めながら、迷いなく窓辺へと向かう。

カーテンを勢いよく引き開けると、室内に気持ちの良い朝の太陽の光が一気に差し込んだ。

すると、ベッドにくるまった何かまでもそと動いた。毛布を頭から被り直して、まるで芋虫のように光から逃げようとしている。

「う……っ」

「団長、起きてください！ 今日午前中から任務がありますよね？ そろそろ起きないと間に合わなくなりますよ」

「あと五分……」

「いいから早く起きてください!」

毛布の端を掴んで、えいつと引き剥がす。毛布は思いの外あっさりと取れて、その下から丸まった広い背中が目の前に現れた。古い剣傷がいくつも走る、騎士団長としての年月が刻み込まれた背中。

一瞬だけ、反射的に視線を逸らす。——でも、まあ。毎朝のことだし。相手はあの団長だし。私は気を取り直して、なおも丸まり続ける団長に向き直った。

「うう、ミラ……。寒い」

「そんな格好して寝てるからですよ! 寝巻きもちやんと用意しておきましたよね? どんなに面倒でも、せめて服くらいはちゃんと着て寝てください!」

「ふああ……。わかった。……ん」

起き上がって大きく伸びをした団長が、私に向かって手を差し出した。上半

身は裸のままなので、伸びをするたびに肩から腹にかけての筋肉がはつきりと動くのがわかる。綺麗に六つに割れた腹筋に視線が吸い寄せられそうになつて、思わず視線を逸らした。

「……はい、どうぞ」

（ご令嬢たちが、団長に抱かれたーい♡　なんて噂するのもわかる気がするわ……。さすがに私だつて恥ずかしい）

私はなるべく団長を視界に入れないようにしながら、部屋にかけてあつた騎士服を手渡した。

「ありがとうございます。……よいしょつと」

団長の衣擦れの音を聞きながら、私はシーツを剥がしていく。先ほどまで団長が寝ていたそこには、まだ温もりが残っていた。余計なことを考える前に、と、ばふつと勢いよく布団を持ち上げて、手際よく整えていく。

衣擦れの音が止んだので、後ろを振り向く。髪の毛はぴよこんと跳ねているし、胸元のリボンは大に曲がっていた。

（……騎士団長としての威厳も形無しね）

「団長！」

「んー」

団長は慣れたもので、私の呼びかけにびたりとその場で止まった。私は踏み台代わりの椅子に乗って背伸びをしながら、不恰好に結ばれたリボンをしゅるりと解く。結び直していると、眼下の団長がにやにやと私を見上げていた。世話を焼かれるのを楽しんでいるような、そういう顔だ。

「……なんですか？」

「もつとかがんだ方がいいか？」

「大丈夫です！ そのままじつとしていてください！ ……ほら、できました

よ。次はその寝癖をなんとかしましょう」

なんとなく落ち着かないその視線から逃げるように、私は丸椅子を指差した。

団長は大きなあくびをしながら、言われるままに腰かける。私は櫛を手にとり取って、美しい金色の髪をそつと梳き始めた。朝の光を受けてさらさらと流れるその髪は、梳かすたびに陽の色をこぼすようで、毎朝のことながら少しだけ見惚れてしまう。

「ああ、そうだミラ。今日の夕飯は必要ないから」

「え？ ……あ、接待か何かですか？ 今日美味しいお肉が入ったから、団長の好きなハーブ焼きにしようと思ってたのに」

「任務が長引きそうだな。だが……、非常に残念だ。ミラのハーブ焼きが食べられないのは惜しい。ああ、そうだ、夜食用に作っておいてくれるか？ さつさと

片付けて帰ってくる」

（残念、ね……）

私はぼりぼりと頬を搔いた。この人はいつもこういう言い方をする。惜しい、残念だ、と大げさに嘆いてみせて、でもその言葉がどこか憎めない。だからどれだけ部屋を散らかされても、野菜を残されても、また作ろうという気になつてしまうのだ。

「美味しいハーフ焼きを作つて待つてますから！ 団長の好きな田舎の固パンも一緒に作つておきますね」

「ああ、楽しみにしてる」

立ち上がった団長の影が、ずっと私の視界を覆つた。目の前が、団長の鍛えられた胸板でいっぱいになる。大きな手が持ち上がったかと思うと、そのまま――ぼん、ぼん、と頭を撫でられた。

(……また子ども扱いして)

長女として弟の頭を撫でることには慣れていても、逆に撫でられた記憶は幼い頃からほとんどない。今だに慣れなくて面映い気持ちになりながらも、私は撫でられるままになっていた。

団長はそのままサンドイッチをひとつ手に取って、「うまいぞ」と言いながら二口で平らげた。もう片方を私に差し出してくるので、受け取って齧る。朝の、お決まりのパターンだった。

「よし、そろそろ行くか。……ミラ、途中まで来てくれるか？」

「はい、もちろんです」

洗濯物のカゴを抱えて、二人で部屋を出た。騎士団の宿舎は何棟かに分かれていて、団長の部屋は本棟の最上階にある。長い廊下を並んで歩きながら、団長が「固パンはあの蜂蜜と一緒に食べたい」などと呑気に言うので、私は苦笑

しながら「はいはい、ちゃんと用意しておきますから」と返した。

階段を下りきったところで、中庭に数名の騎士たちが整列しているのが見えた。私はすつと団長の斜め後ろへと引き下がる。

「シグルド団長、おはようございます！」

団長がぱつとマントを払った。団長の背筋が伸び、纏う雰囲気ですつと変わる。先ほどまで芋虫のように布団に丸まっていた人と同じとは思えなかった。

その場を団長が掌握したのを肌で感じた。

「今の情勢はどうなっている」

低く静かな声が騎士たちに飛ぶ。

「は！ 溪谷の魔物ですが、昨夜から活動域がさらに広がっております。周辺の村への被害も確認されており、早急な対処が必要かと」

「やはりそうか。……第二部隊は溪谷の南口を抑えろ。第四部隊は村の避難誘

導にあたってくれ。俺は前に出る」

「承知いたしました！ 各部隊にはそのように伝達いたします」

団長が次々と指示を飛ばすたびに、騎士たちが慌ただしく動き始める。その言葉の端々から、今回の任務がただごとではないことは私にもわかった。村への被害、活動域の拡大——そういった言葉が、胸の奥にずしりと沈んでいく。

でも顔には出さないようにしなければ、と思った。不安そうな顔で見送られても、団長たちの迷惑になる。

そんなことを考えていた私の肩に、ぽん、と温かくて大きな手が乗せられた。

「夜食、楽しみにしてるからな」

さっきまでの部下たちへのものとは明らかに違う、柔らかい声だった。私を安心させようとしてくれているのだろうか。——危険に向かうのはむしろ団長た

ちの方なのに。聖女にもなれなかった私には、ここで帰りを待つことしかできない。そんな齒痒さを胸の奥に押し込めて、私は大きく息を吸った。

「いつてらっしゃいませ！ とびきりのご飯を作って待っていますから、早く帰ってきてくださいね」

にこりと笑って言えば、そのままくしゃくしゃと頭を撫でられてしまった。

（どうか今日も、団長に神のご加護がありますように）

祈ったところで、魔力もろくない私の言葉に力などない。それでも気持ちばかりの祈りを捧げて、その広い背中を見送ったのだった。

（私は、私にできることをしましょう）

団長たちを見送った私は、まず団長の自室の窓を開けて空気を入れ換え、散

らかった書籍や書類を端に寄せ、空っぽになつてゐるカップを洗つて拭きあげる。窓周りや机、本棚などを軽く水拭きして、ようやくひと息ついたころには、もう陽が高くなつていた。

次は洗濯だ。カゴに洗濯物を詰め込んで、廊下を歩く。

ちなみに洗濯に魔法は使わない——というより、使う者がほとんどいない。魔力のある者は騎士や貴族として取り立てられるのが常で、下働きの使用人には魔法を使えない者も多い。そういった意味で、洗濯は手洗いが主流だ。魔力量の極端に少ない私も例によつて毎日手洗いしている。そもそも、団長の衣類は上質な素材のものが多く、魔法を使うと生地が痛んでしまうらしい。もつとも団長本人は、そんな事情には露ほども頓着せず、脱いだ服を床に直置きするのだけだ。

騎士団寮の洗い場は、中庭に面した石造りの長い流し台が並ぶ一角にある。

日当たりがよく風通しもいいので、洗ったそばから乾きが早い。日中、騎士たちが出払ったあとのこの場所は、使用人の女性たちの格好の社交場にもなっていた。

今日も大きな声が和氣藹々と石壁に響いていた。

「ねえ聞いた？ 今回お選りになった聖女様の中から、団長のお相手を探そうって話があるらしいわよ！」

「まあ！ でも団長ったら、いつもそういうお話をさらっと流しちゃうじゃない。どうなのかしらねえ」

「でもいい年頃でしょ。そろそろ腰を落ち着けてもいい頃合いよねえ。私の娘なんてどうかしら、ねーえ！」

笑い声上がる。和氣藹々としたその空気は、団長の気風をそのまま映したようだった。団長は階級にうるさいところがなく、使用人たちが多少羽を伸ば

して働いていても咎めない。だからここでは、騎士たちがいなくなったあとの時間は女たちの独壇場だった。

（……団長が、結婚）

胸にちくりと何かの痛みが走ったような気がして、私は思わず足を止めた。

（でも、でも……！ 団長は脱いだ服はそのままだし、野菜は残すし！ 結婚される聖女様がお可哀想だわ！）

必死にそう言い聞かせても、今朝の団長の温かい手のひらと笑顔が、するりと頭に浮かんでくる。

——あ、だめだ。これは、だめ。

かぶりを振って、カゴを持ち直す。笑顔を作ってから、私は他の使用人たちに声をかけた。

「おはようございます！ 今日もいい天気ですね！」

「あら！ ミラちゃん、おはよ！　ねーえ、ミラちゃんは何か知ってたりしない？　団長に結婚の——」

「こら、馬鹿！」

隣に立っていた年かさの女性が、さつと手を伸ばして話の途中の袖を引いた。勢いよく口をつぐんだ相手が、気まずそうにこちらを見る。

（……気を遣わせてしまったわね）

私と団長の仲を勘繰る者は、使用人たちの間では少なくない。落ちこぼれの聖女候補を、団長がわざわざ拾ってきてそばに置いているのだ。今まで誰にもそんなことをしたためしがない団長が——それだけで、あれこれ想像したくなる気持ちはわからなくもない。

問題は、団長本人がこの噂をまったく否定しないことだ。

好奇心旺盛な使用人たちが関係を問い質すと、団長はあの整いすぎた顔にさ

わやかな笑みを貼り付けて「想像に任せるよ」と言うだけなのだ。長い金の睫毛を伏せて、いかにも含みありげに。

それでは否定になつていない。だから噂だけが一人歩きして、私が「何もないです」と言つても「照れ隠しだ」と本気にしてもらえない。

「全然気にしないでください！ 私と団長は何もないですから。素敵な聖女様とご結婚されるのなら、それ以上の幸せはないと思います！」

自分から出た言葉のはずなのに、まるで違う人が話しているようだった。心の奥底から浮き上がつてこようとする何かに、私はそつと蓋をした。

そうして洗濯物をカゴから取り出しながら、今日もただ手を動かすことに集中するのだった。

月がてっぺんまで登つても、団長はまだ帰つてきていなかった。

暖炉の火を小さく保ちながら、私はやきもきと待ち続ける。夜食に用意したハーブ焼きとパンはとうに冷めてしまつていた。

（……もしかして、何かあったのかしら）

不安が頭をもたげる。団長はこの国最強の騎士だ。並みの任務でこれほど遅くなることはまずない。それがこんな時刻まで。

そのとき、外から賑やかな声が聞こえてきた。窓から身を乗り出すと、松明の明かりの中に見覚えのある金髪が見えた。他の騎士たちと何か話しながら宿舎へ向かつてくる。無事だ——と、ほつと息を吐いたのも束の間、その足取りがいつもと違う気がして、私は眉をひそめた。

しばらくして、廊下に足音が近づいてきた。

「おかえりなさい、団長！」

ドアを開けると、団長はいつも通り立っていた。私が先ほど感じた違和感も杞憂だったかと思うほどに。だけど――。

泥のついた頬が、松明の光の下でかすかに上気している。呼吸も、ほんの少しだけ浅い。

（おかしい。いつもなら疲れ一つ見せない人なのに）

「……ああ、ミラ。ただいま」

声が、かすかに掠れていた。

「団長、少し……顔色が」

「ハーブ焼き、まだあるか」

形の良い唇の端がわずかに上がって、笑おうとしているのがわかった。でも、どこかぎこちない。私は迷わず手を伸ばして、背伸びをしながら団長の首のあたりに触れた。

「え——っ」

熱い。触れただけで手が火傷してしまいそうなくらい、団長の首から驚くほどの熱が伝わってくる。

「団長、これ……!」

見上げると、エメラルドの瞳が熱っぽく揺れていた。いつもとは違う切迫した表情に思わず心臓が跳ねそうになるけれど、今はときめいている場合ではない。

「あー……、ミラに隠し事はできないな」

団長が苦笑して、それから小さく熱い息を吐いた。

「……少し、体がつらい」

私は目を見開いた。あの団長が。弱音の一つも吐いたためしのない、この国最強の騎士が。体がつらい、と。

（絶対に、ただ事じゃないわ……！）

「鎧を脱いでください……！　それからベッドに」

団長は珍しく素直に頷いて、留め具に手をかけた。でも指先が覚束ない。

私は「貸してください」と割り込んで、胸元の紐を解きにかかった。鎧の下、薄い衣越しに鎖骨の硬い輪郭が指先に触れた瞬間——団長の喉の奥で、低い音が鳴った。熱をはらんだその吐息に、私の手が、止まる。

「す、すみません、痛みましたか」

「……いや」

熱い息と一緒に落ちてくる短い答えを聞いて、私はなんとか手を動かし続けた。鎧を外すと、団長はゆつくりとベッドの端に腰を下ろした。

そこで私は、息を呑んだ。

くつろいだ胸元から、うつすらと黒い紋様が覗いている。

（魔力の暴走——？ いや、これは……）

「団長、これは……呪いを受けたんですか。医療班や、他の聖女様方はご存知な
んですか」

「……言っていない」

団長は苦しげに、ゆっくりと胸で息をする。その動きに合わせて紋様が生き
物みたいに脈打って、輪郭がじわりと滲む。

「く……、高位の魔術師や聖女に診せたところで逆効果になる。完成された魔
力はこの呪いと反発する——幸い当人の魔力が源になっているから致命的なこ
とにはならない。高熱やだるさが出る程度だ。だから戻ってきた」

「……え？」

団長が何を言わんとしてるのか、なんとなくわかった。けれど、わかりかけた
瞬間に、私はそれを自分で押し込める。

熱を宿した団長の瞳が私をじつと見つめているのが、なんだか落ち着かない。

暖炉の火がかすかにパチパチと燃えている。団長の荒い呼吸と、私の大きな心臓の音だけがやけにはつきりと聞こえる。私は、団長の瞳に射抜かれたまま、一歩も動けない。

「ミラ、お前が浄化してくれないか」

「……え？　で、でも、私の魔力量の少なさは団長もご存知でしょう？　私じゃ、とても——」

「あるだろう。魔力量が少ない者でも、直接送り込む方法が」

「……っ」

団長がベッドに座ったまま、そつと私の手を取った。剣を握りつづけてきた無骨で大きな手が、私の手をすつぽりと包んでしまう。

(……熱い)

そんな場合ではないとわかつているのに、心臓がひとりでにどきりと跳ねた。

「そ、それは……」

そう、確かにある。魔力を直接相手へと送り込む方法——それは粘膜を通じて、自分の魔力を流し込むということ。魔力量が少なくても、接触さえできれば微量の魔力でも確実に届けられる。だからこそ有効な手段ではあるけれど、その方法はその特性上。夫婦や恋人など、ごく親しい間柄でしか行わないものだ。

(だから私も、考えないようにしていたのだけど……)

団長のエメラルドの瞳が熱く潤んで、彼の前で動けなくなっている私の目を射抜いた。呪いで熱に浮かされているはずなのに、その奥からそれとは違う何

かが滲んでいるような気がして、私は目を逸らせなくなってしまう。

「ミラ」

呼ばれた瞬間、胸の奥がどくんと鳴った。

名前を呼ばれるなんて、いつものことのはずなのに。今夜はその声がいつもより低く、甘く掠れている。繋いだ手がねだるようにそつと揺れた。

部屋の空気が、甘ったるくて重い。それが何なのか知りたいような——でも知ってしまったら、今までの関係が戻れなくなる気がする。これ以上はだめだと、本能が叫ぶ。

張り付く喉を無理やりに開いて、声を出したとき。

「だ、だんちよ……、きやつ！ ……んん!?」

手を引かれた瞬間、体ごと引き寄せられた。気づいたら団長の胸の中にいて、硬く逞しい膝の上に座らされていた。

そして——唇が、触れていた。

（え……!? こ、これなに……!? 唇、あつつい……! 私、団長と……!?）

「んん……ッ、んう……っ♡ ……はっ、だんちよ……、んむうッ♡」

「……はッ、シグルド、だ」

「……ん、んあ……ッ、ちゅう……♡ シ、シグルド……、さま、あ……っ、んむッ♡」

キスの合間に彼の名前を呼べば、わずかに開いた唇の隙間から彼の分厚い舌が潜り込んでくる。逃げ場を塞ぐように重ねられた熱に、頭の中が真っ白になつていく。

（ああ……、だんちよ——シグルド様の唇、きもちいい……♡ これは治療なのに……♡ 魔力を送るのに集中しなきゃいけないのに……、何も考えられなくなるう……♡）

「ちゅぱ……っ♡ あー……、ミラの魔力はあつたかくて心地いい……。ほ
ら、もっと舌を出して。体液もたくさん交換し合った方が効率がいいだろ
う？」

「そ、それは……♡ んむうッ♡ うゝ……ッ♡」

あまりにも恥ずかしいお願いに戸惑いながらも、シグルド様を上目遣いで見
ながら、べえ……♡ と真つ赤な舌を出す。

「ふふ……、いい子だな、ミラ。舌も小さくてぽってりとして……♡」

ぱく♡♡ ちゅるるるるッ♡ ちゅるうゝ……ッ♡♡

「んううゝ……ッ♡ ん、ふ……ッ♡ ちゅぱあ……♡」

（舌吸われちゃってる……ッ♡ 魔力が吸い出されてく……♡ あ……ッ、そ
んなに強く吸われたら、息できな……っ♡）

キスはさらに熱を帯び、もはや呼吸をすることさえままならない。シグルド

様は私の後頭部を大きな手で固定し、こじ開けるようにしてさらに深く、舌を割り込ませてくる。何か縋るものが欲しくてシグルド様の太い首に腕を回すと、さらにきつく抱きしめられてしまった。

「んう……、ちゅぷ……ッ♡ シグルドさまあ……ッ、ん、ふっ♡ ……あ、えッ!?♡」

私の腰に回されていた手が、するりと背中から脇腹に這わされて、さわさわ♡ と胸を下から持ち上げるようにして揉まれる。

（ど、どうして……ッ♡ こんなことされたらさらにきもちよくなって……ッ♡ おっぱい揉んじやダメなのに……♡ あ、やだやだッ♡ おっぱいの大きさを確かめられてるッ♡）

思わず腰が引けそうになってしまふのに、後頭部を押さえ込む力強い指先がそれを許してくれない。遠慮なく胸を揉みほぐされて、身体が溶けてしまいそう

だった。

「……は、あッ♡ し、ぐるどきまッ!? あ、だめ……ッ♡ リボン解いちや……ッ♡」

団長が器用な手つきでリボンを解くと、下着がするりと落ちて豊かな乳房がぷるん♡ とこぼれ落ちた。その中心では、薄紅色の乳首がぷつくりと主張してしまっている。

「やつぱりミラは着痩せするタイプだったんだ……。想像してたよりも……。ずっと美しい。ああこら、暴れるんじゃない」

——カリ♡♡

「ひゃああん♡♡」

乳房の中心のぷつくりとした敏感な突起を、整えられた爪で引っ搔かれて、自分でも聞いたことのないような恥ずかしい声が漏れ出て、思わず口に手を当

てる。

(やだ……ッ、わたし……♡ こんな声……ッ♡)

「声、我慢しなくていいんだぞ……？ ミラのそのいやらしい声、もつと聞かせてくれ」

カリッカリッ♡ カリカリカリッ♡

「ああんッ♡ やだ、ああ、ん……ッ♡ りようほうするなんてだめ、え……ッ♡ んあッ、やだやだあ……ッ♡」

両方の乳首を引っ搔かれるように刺激されて、甘い声が漏れ出るのを抑えられない。シグルド様の動きに合わせて私の身体はビクビク♡ と小刻みに震える。

(ど、どうして……ッ♡ 魔力を送り込むのにこんなこと必要ないはずじゃ……ッ♡)

身体を駆け巡る甘やかな痺れに膣が締まって、蜜壺から愛液が溢れ出してショーツにじゅわあ……ッ♡ と染みていく。お股がじんじん♡ して、思わず膝を擦り合わせると、にちゅり♡ といやらしい音が鳴ってしまつて、顔がかあつと赤くなる。

「ミラは素直でいい子だと思つていたが……。それは身体も同じようだな」

「え……、きや……ッ!? んむうッ♡」

キスで唇を塞ぎながら、シグルド様が私の身体をいとも簡単にベッドに押し倒す。あつという間の出来事に、抵抗する間もなかった。

「んむ……ッ、は、あ……♡ しぐるど、さま……?♡」

シグルド様の香りが染みついたベッドと、彼自身の熱い体の間に挟み込まれて、私は身動き一つ取れなくなる。蕩けるようなキスに頭がふわふわとする中、ぼーっとシグルド様の顔を見上げると、欲望に濡れたエメラルドの瞳と目

が合った。

シグルド様が上体を起こして、その逞しい腕で私の膝を割り開こうとする。

（え、うそ……!?♡ まさか……ッ♡）

これからシグルド様が何をしようとしているか唐突に理解してしまう。そう、体液の交換は必ずしも唾液の交換だけではない。そう、例えば――。

じゅるッ♡ ずろろろ……ッ♡♡

「やあああ……ッ♡ そんなところッ、舐めちや、ああッ♡ んああッ♡」

目の前の光景が、信じられなかった。この国最強の騎士団長が、私の股の間に顔を埋めて、しかも濡ればそっててらと光るいやらしい蜜を吸い上げている。

「……は、あッ♡ うま……、たまらないな……」

熱い吐息がおまんこにかかるたびに、身体がびくりと跳ねてしまう。味わうよ

うに愛液を吸われて、羞恥に身体がぶわつと熱くなった。

「ううう……ッ♡ ひ、あッ♡ んうう……ッ♡」

（舌がナカにはいつちやつてるうッ♡ あ、やだやだッ、そんな奥までべろ入れないでえ……ッ♡ シグルド様の鼻がクリトリスに擦れて……ッ♡ 気持ちよくなつちやうッ♡）

気持ちがいいのと恥ずかしいのとで、頭はすでにショート寸前だった。だけど、魔力量の少ない私がシグルド様に魔力を分け与えるためには、こうして体液を交換するのが最も都合がいいこともまた確かだった。

「ずろろ……ッ♡ すごいな……、吸ったそばからすぐに溢れてくる……♡ こつちも触ってみようか」

——くりッ♡

「……ッ♡ ああああッ♡」

長く骨ばった指が、すでに赤くぷつくりと主張した秘豆をすり……ッ♡と擦っていく。ナカをほじるようにぬろぬろ♡と蠢く舌の刺激と合わさって、快楽が何倍にも膨れあがる。私が思わず背中をのけぞらせると、シグルド様にさらに秘部を突き出す格好になってしまう。

すりすりすり……♡　くりゆくりゆくりゆ……ッ♡

「あー……、すごい♡　ミラの小さい女の子ちゃんぽ……、ズル剥けになつてきたぞ……♡　真っ赤に勃起して……♡　んちゅ……ッ♡」

「あああ……ッ♡」

ズル剥けになったクリトリスを唇で上下に挟み込むようにぱくつ♡と咥えられて、そのまま一気に吸われてしまう。頭にチカチカと火花が散って、太ももががくがく♡と小刻みに痙攣する。

「すごいひくついて……♡　甘イキきもちいいなあ……♡　ああ、愛液もまたこ

んなに溢れ出して……、ずるるる……ッ♡」

「ああ……ッ♡ しぐる、どさまぁッ♡ あ♡ また吸っちゃ、あ……ッ♡」

（何これ何これ……ッ♡ クリ吸われて甘イキして……ッ♡ すぐにナカから溢れる愛液飲まれちゃってるッ♡ きもちいのずつとで……ッ、あ、またくる……ッ♡）

「あ……ッ♡ んんうッ♡ しぐる、どさまぁッ♡」

「じゅる……ッ♡ 痙攣すごいなあ……♡ ミラ、イクときはちゃんとイクって言ってからイクんだぞ？」

ぢゅるるッ♡ れろれろれろ♡ くりゆくりゆくりゆつ♡

「やらあ、あぁッ♡ イクッ♡ しぐるどさ、まッ♡ イキま……ッ、しゅッ！」

♡ イッ……きゅう!!♡♡」

ビクビクビクッ♡♡♡ ビクンッ♡♡♡ ビク……ッ♡♡

足先までピン♡♡と伸ばして、腰を大きくのけ反らせる。ひとりでに内側に閉じかけた足をシグルド様の太い腕が押さえつけて、足を大きく開かされてしまう。絶頂で溢れ出た愛液も、収縮するおまんこの入口も、全部が丸見えだ。

「ぢゅうううッ♡♡♡ ごく……ッ、は、あ……♡♡♡ ミラの魔力は甘いな……、ああ奥からどんどん溢れてくるぞ……ッ♡♡」

ぐちゅぐちゅぐちゅッ♡♡

「ひゃあああッ♡♡♡ シグルドさまあッ♡♡♡ イったばつかのナカ、そんなに掻き混ぜちゃ、あッ♡♡」

シグルド様はひくつく膣に太い指を一本差し入れた。愛液を掻き出すように動かされれば、達したばかりの膣壁が悦ぶようにぎゅううッ♡♡と締まる。

「だけどナカはきゅうきゅう♡♡♡ と俺の指に絡みついてきてるぞ……？」

「やつ、あ、うあつ♡ んうッ、あ♡ ……うッ!? しょこ、お……ッ!!♡
 「あー……、見つけた♡」

シグルド様の指が、おまんこの上の方にあるざらついたところを探り当てる。
 そこだけは他の場所と違っていて、指の腹でくいつ♡ と押されただけで、お
 腹に重たく深い快感が溜まっていく。

「ここだけ興奮して赤く腫れ上がってる……♡ ミラ、ここ何かわかるか?」

「あッ♡ わかんな……ッ、あああッ♡ しょこッ♡ なんかあ……ッ、へん
 で……ッ♡ ぅうッ♡」

「腰くねくねさせて可愛いなあ……♡ あ、こら逃げるのはだーめ♡ ここ、
 Gスポットって言うんだぞ」

「やあ……ッ♡ らめえッ♡ あ、ぅうッ♡」

初めての快楽に戸惑い、本能的に逃げようとする私の身体をシグルド様が押

さえ込む。膝裏を抱えられて、私はなす術もなく頭のおかしくなりそうな快楽を享受するしかなかった。

「ミラ」

何かが迫り上がってくるような予感に、身をぎゅつと縮こませてシーツを握る。それに気づいたシグルド様は私に覆い被さってきて、口付けを降らせた。さつきしたような、魔力を吸い出すようなものとは違う、私を優しくあやすような口付け。舌先で歯列をそつとなぞられて、力が抜けていく。

「んん〜……ッ♡ あッ♡ ふッ……♡ うづ♡ しぐるどさまッ♡ ほんとに……ッ、それなんかでちゃうッ♡」

ぐちゅぐちゅぐちゅ♡♡ ぐちゅぐちゅぐちゅ♡♡

彼が指をかき回すたびに、おまんこから溢れ出る水音はひどくなるばかりだ。気持ちよすぎて、このままじゃダメになってしまうような気がして、彼の太

い腕に縋り付く。だけどシグルド様は腕を止めるどころか、さらに深く、的確な角度で蜜壺を押し上げていつて、腰が勝手に動いてしまう。

「……は、あッ、全部出してくれ♡ それはきつとお前が想像するようなものじゃないから」

「え、どうゆ……ッ♡ ……ッ!?!♡ あああッ♡」

ぐちゅぐちゅぐちゅ♡♡♡ ぐちゅぐちゅぐちゅ♡♡♡

指の動きがより一層激しくなつて、これ以上はないと思つていた快樂がまた上書きされてしまう。

ゆつくりと唇が離れたかと思うと、シグルド様が再び私の股の間に顔を近づけた。膣がぎゅうぎゅう♡♡♡ とうねつてシグルド様の太い指を締め付ける。尿意にも似た強烈な何かとともに、私は絶頂へと押し上げられていく。

ぐちゅぐちゅぐちゅ♡♡♡ ぐちゅぐちゅぐちゅ♡♡♡

「ああッ♡ イクッ♡ またイクク♡ あ、ほんとにでちや、あッ♡ イクイク、イツ……、ク……ッ!!♡♡」

ビクビクビクッ♡ ぷしやあああああッ♡♡

頭が真っ白になって、全身が痙攣する。それに合わせて、おまんこから愛液とはまた違う、さらさらとした何かが勢いよく溢れた。

「え……ッ!?♡ やあッ♡ だめ、だめえ……ッ♡」

シグルド様がおまんこに唇を近づけたと思ったら、そのさらさらとした液体を溢れたそばからごくごく♡ と飲み干していく。あまりにも恥ずかしくて、シグルド様の頭を必死で押しのけようとしたけれど、びくともしなかった。

（あ……ッ♡ ダメダメダメッ♡ おしっこ出ちやったの飲まれてるッ!?♡ イッたばかりのおまんこそんなにぺろぺろ♡ されたら……ッ♡ 頭真っ白にな……って……、あ、れ？）

耳鳴りがして、いやらしい水音も、シグルド様の顔も、じわじわと遠くなくていく。

「し、ぐるどさ……ま……」

「……はッ。ミラ……」

（ああ……、シグルド様……。私、もう……）

意識が途切れる直前、額に優しいキスが落とされたような気がする。それが夢なのか現実なのかわからないまま、ふわふわとした多幸感の中、私は意識を失った。

部屋の中に薄明かりが差し込んでいる。

身体が何か温かいものに包まれているような気がする、私はそっと目を開け

た。

（あ、れ……。つて、え!?）

目に飛び込んできたのは広い胸板。思わずぴしりと固まってしまった私の頭上で、優しく低い声がした。

「ああ、ミラ。起こしてしまったか？」

ぱつと反射的に顔を上げると、端正な顔がすぐそこにあつた。柔らかく細められたエメラルドの瞳は、まるで慈しむように私を見つめている。

「だ、だんちよう……」

ドキリと心臓が跳ねる。咄嗟に身を引こうとしたけれど、私の身体を抱き込む団長の腕は、少しも緩まなかった。

（うう……。昨日、私……。あのまま寝て……。？ 寝巻きも、着てる……。？ もしかして、団長が着せてくれたのかしら……）

「体調はどうだ。気持ち悪かったりしないか？ 熱は……、なさそうだが」

おもむろに団長の手が伸びて、額にかかった髪をそつと払いのける。そのま
ま大きな手のひらが額に置かれた。騎士団長とお世話係の距離感では到底あり
えない近さに、かあつと顔が熱くなる。

「だ、団長こそ……！ 呪いは、どうなりましたか？」

「ひとまず落ち着いた。熱も下がったよ、ミラのおかげだな」

そう言つて団長が毛布をめくると、昨夜あれほど禍々しく明滅していた黒い
紋様が、ずいぶんと薄くなっているのがわかった。確かに昨日よりも顔色が良
さそうだし、本人が言っていた通り熱もなさそうだ。私はほつと肩を撫で下ろ
す。

「よかったあ……。団長……」

「……団長？」

団長が片眉をわずかに上げた。彼の手が私へと伸びる。

「ミラ、呼び方は昨夜教えただろう？」

そつと、無骨な指先が唇をなぞつた。ただそれだけのことなのに、艶やかなその表情に、昨夜のことが一気に身体の奥から蘇ってくる。頬だけじゃなく、耳まで熱くなった。

「え、えと……」

「……ミラ？」

（……困ったわ）

私は団長のお世話係のはずだ。ご飯を作つて、部屋を片付けて、脱ぎっぱなしの服を拾う——それが私の仕事のはずなのに。こんなに近い距離で見つめ合つて、そんな柔らかい声で名前を呼ばれるなんて。そんなの、まるで——。

（……いいえ、やめよう。だめよね。考えちゃ、だめ）

「シグルド様！ 私、そろそろ朝ご飯の支度をしないといけないので！」

するつと身を振ってなんとかシグルド様の腕の中を抜け出す。何か言いたげな瞳から目を逸らすように、布団をばふつと被せ直した。

「シグルド様はまだ本調子ではないでしょうから、もう少しゆっくりなさっていただくさいね！」

「……ふ、わかったよ。今日の朝飯も楽しみにしてる」

布団の中から目だけを出したシグルド様が、愉快そうに私を見つめていた。その視線から逃げるように、私は足早にシグルド様の部屋を後にしたのだった。



とある日の夕暮れ。窓の外がオレンジ色に染まり始める頃、私はシグルド様の執務室で仕事の仕上げにかかっていた。

（書棚の整理は終わったし、書類の写しも束ねた。埃払いも……よし）
部屋には私の足音と、シグルド様が万年筆を動かすさらさらとした筆記音だけが響いている。

呪いはいまだ、完全な浄化には至っていない。シグルド様は周囲に「山積み書類を片付けている」と言い訳しながら遠征や表立った任務を他の騎士に割り振り、しばらく執務室に籠もる日々を続けている。幸い身体の調子は日を追うごとに落ち着いてきていて、日常生活に支障はなくなってきた。それでもこの時間帯だけは来客も取り次がないよう言い付けてあつて、扉には鍵がかかっている。

「ふう……」

万年筆を置いて、シグルド様が椅子の背に深くもたれた。そのタイミングを見計らって、私は淹れたてのコーヒーを机に置く。

「シグルド様、お疲れ様です。今日は南の産地のものが手に入りましたよ」

「ありがとう。……いい香りだ。南方の豆は浅めに煎ると酸味が立つが、これはちょうどいい頃合いだな」

「お好みに合いましたか」

シグルド様がカップを持ち上げて、まず香りをゆつくりと吸い込む。それからそのまま口をつけた。喉仏がごくりと動く。

（……いけないわ）

伏し目がちなその横顔が、妙に色っぽく見えてしまつて、私は慌ててぱつと視線を逸らした。けれど、シグルド様にはバレバレだったらしい。

「……ミラ、おいで」

「……はい」

差し出された手に導かれるまま、シグルド様の膝の上に腰を下ろす。上等な椅子がわずかに軋んだ。シグルド様の腕が背中から回されて、正面からゆつくりと抱き込まれる。

シグルド様の顔がゆつくりと近づいてくるのに合わせて、私はそつと目を閉じた。触れた唇から、すぐに彼の舌が口内に入り込んでくると、彼が飲んだばかりのコーヒーの味が私の口にも広がる。

「……ん、ちゅ……♡♡ は、あ……♡♡ ん、ぢゅるう……♡♡」

シグルド様にちゃんと魔力を送れるように、と私からも必死に舌を絡める。

「……は♡♡ ミラ……、舌絡めるのうまくなつたな……。ほら、もつと奥まで……」

「ん、ちゅ、う……♡♡ は、はい……、んむう……♡♡」

シグルド様が私の腰を引き寄せるのに合わせて、私も彼の首に手を回してぴたりと密着した。彼の服越しの体温が、じんわりと私の肌に移ってくる。

（うう、身体が熱い……♡ これは呪いを解くための治療なのに……。こうしてぴったりくっついてキスしていると、溶けちゃいそう……。♡）

舌を絡め合わせて魔力を送っていると、だんだんと下腹部が熱く疼いていった。その熱さに耐えられなくなつて腰がゆらゆらと揺れそうになると、シグルド様の長く太い腕が私の腰をグッと掴んで、さらに引き寄せられてしまう。ゴリッ♡ とした熱い何かが下腹部に当たつて、思わず腰がびくりと跳ねる。

（これ、やつぱりシグルド様の……。よね？）

男性が性的接触をするとそうなるということは聞いたことがあるので、彼としては深い意味はないのかもしれない。その証拠に、彼の方から性処理を求められたことはなかったし、魔力の受け渡し以上のことは、まだ何もない。

（ああ……、だめだめ♡ キス気持ちよくって腰動いちゃう……♡ 身体、あつつい……、ほしい、ほしいよお……♡）

私はいつからこんなに浅ましい女になってしまったんだろう。シグルド様と魔力を交わすたびに、最近は身体の芯が燃えるように熱くなる。下腹部から蜜が溢れて止まらなくなるのも、下腹部に触れるその大きな熱いもので塞いでほしいと思ってしまうのも、これまでの私では考えられなかった。

「んん……ッ、ちゅ……♡ んむう……ッ、ぢゅるッ♡ は、あ……ッ♡」

腰を押し付けているうちに、すっかりとはしたなくずり上がってしまったスカート。ショーツはもうすでにびちゃびちゃで、シグルド様のズボンの股のところを濡らしてしまっていた。

「……こっちもすごい音だな」

「ひゃっ♡」

シグルド様が私の身体を支えたまま立ち上がる。さっき私が片付けたはずの書類が再び乱雑に押しのけられて、広い執務机の上に座らされた。

そのままシグルド様の腕が私の膝を割って、足を大きく開かされてしまう。

「パンツ濡れすぎてマン筋透けてるぞ……♡ どこにクリトリスがあるのかはつきり見える」

——ピンッ♡

「ひやうううッ♡」

膨れ上がったクリトリスを、デコピンするように弾かれて叱られる。切なく潤みきっていたおまんこは、待ち望んでいたその刺激に歓喜し、愛液をどろおッ♡ と滴らせる。

「すっご……、溢れてきた……。ミラはいい子だな。最近だいぶ感度が上がってきたんじゃないか？ ミラが感じれば感じるほど……。俺はミラの魔力を摂

取することができるからなあ……♡」

「あうう……♡」

「ほら、胸の紋様もだいぶ薄くなってきた……。これだけミラがたくさん俺に魔力を与えてくれたんだ。今日も、たくさん気持ちよくなってくれよ？」

大きく開いた団長の胸元をちらりと見ると、そこにはだいぶ薄くなった紋様があった。薄くなつていく紋様を見て、安堵するべきなのに、胸の奥がきゅつと締まる。

シグルド様が、私の前にゆつくりと膝をつく。そんな動作が騎士としてやけに様になつていて、どきりと心臓が跳ねた。

彼がするりと私のショーツを脱がせていく。私は浅い息を繰り返し、その光景をじつと眺めてしまう。だって、私はもう知っている。この先に、どんな気持ちいいことが待っているのか。おまんこがまた期待にひくついて、とろお……ッ

♡ と愛液が会陰を伝っていった。

「ほら、ミラ。舐めやすいように膝押さえてくれ」

「う……♡ は、はい……♡」

恥ずかしいと思うより先に、手が勝手に動いて膝を押さえていた。濡れぼそつたおまんこに、興奮したシグルド様の温かい息がかかり、腰がびくりと震える。そして――。

ぢゅうううううううッ♡♡

「あア~~~~~……♡」

大きく天を仰いで、執務室の見事な細工が施された天井を見ながら、私は全身をビクビク♡ と震わせる。

(イってる♡ イってる♡ クリトリス吸われてイっちゃってる……♡)

ぢゆるるッ♡ ぢゅうッ♡ ぢゅう~~~~~……♡♡

「おおッ♡ お~~~~~……ッ♡♡ イってるぅ♡ しぐるど、さまぁッ♡
イってるぅッ♡♡」

「ああ……、どんどん溢れてくるな……♡ ほら、もっと……♡」

——コンコン。

不意に響いたノックに、身体がびくりと跳ねた。慌てて口を押さえる。

「……誰だ。この時間は誰も通すなと言ったはずだが」

シグルド様が静かに、でも低い声でそう言うてから、力の入らない私の身体をそつと抱き上げた。ドアからは死角になるソファに下ろされて、手近にあった毛布を上からかけてもらう。

シグルド様は手早く自分の衣服の乱れを整えると、すうつと目を細めた。さつきまでの甘い気配が嘘のように、騎士団長としての精悍な顔つきに戻っている。彼がガチャリと鍵を開けた。

「なんだ？ 緊急か」

「はっ、はい……！ 王宮の方が急ぎ団長をお呼びするようにと……！」

「……はあ、すぐに向かう。王族の奴らにもそう伝えておいてくれ」

「承知いたしました……！」

声からして、まだ若い見習い騎士だろう。足音が遠ざかっていくのを確かめてから、シグルド様が静かに扉を閉めた。

私は上質な革のソファの上で、自分の中に沸々とこみ上げる熱を持て余していた。はあ、と甘く重いため息をつく。下腹部がまだ切なくて、熱っぽさが治まらない。

シグルド様がこちらに向かってきたので、私は持て余した熱を悟られないように、毛布を肩口まで引き上げてぎゅっと握った。さっき、部下に対応していた騎士団長としての顔とは全然違う、柔らかい目をした彼がそこにいて、その

落差にくらくらしてしまう。シグルド様はそのまま私の額にそつとキスを落とした。

「シグルド様……。あの、お体は……」

「あれだけ魔力をもらったから平気だ。ミラ、すまないな。少し行ってくる。夜には帰って来られるだろうから、少し待っていてくれ。この部屋は改めて人払いしておくから、ゆつくりしていいい」

（私、そんなに物欲しそうな顔しているのかしら……。それに、すぐに動けないのも、全部お見通しなのね）

「わ、わかりました……」

彼の優しさに、また胸がときめいて、彼に触ってほしいと本能が叫ぶ。今すぐにこの熱をなんとかして、と素直に言えたならどれほどいいか。

（だけど、そんなこと言えるはずもないわ……）

私は代わりに毛布をぎゅつと抱き寄せながら、シグルド様を見送った。

「はあ……。風邪でもひいてしまったのかしら……」

日もすっかり暮れた頃、私はシグルド様の自室で、彼の洗濯物を畳みながら一人呟いた。

昼間の熱つぼさが、どうにも消えてくれない。あの後、シグルド様の執務室で少し休ませてもらったはずなのに。

シグルド様はまだ帰ってきていない。王族との話し合いは、いつまで続くのだろうか。呪いはずいぶん落ち着いてきたとはいえ、完全に解けたわけではないのだ。夜遅くまで無理をして、また悪くなってしまうのではないといけないけれど。

（シグルド様の服……。おつきい、なあ）

彼の服を広げるたびに、洗いたての石鹼の香りに混じって、その下からシグルド様自身の香りが漂ってくる。うまく言葉にできない、男の人の匂い。

（……まだ、帰ってこない、わよね？）

一向に開く気配のない扉をちらりと一瞥する。部屋の中には私以外誰もいないはずなのに、きよろきよろと辺りを見回す。そして、そつと彼の服を鼻に近づけた。

すうつと深く息を吸い込む。

よく慣れ親しんだはずの、だけど確かにどきどきする香りが、肺の奥まで広がっていった。なんだか、ひどくいけないことをしているような気分になる。

（いい匂い……。シグルド様って、こんなにいい匂いだっただかしら……）

彼に魔力を分け与えるようになってから、すっかり一緒のベッドで寝ること

が当たり前になつてしまつたからだろうか。お世話係を始めたときには、決して浮かばなかつた感情が私の中に溢れ出る。

前は、騎士団長のくせに私生活はだらしない彼のことを呆れながらお世話していたはずなのに。いつから彼を明確に男性として意識するようになったんだろう。

「……っ」

香りを吸い込んでいるうちに、昼間と同じ熱が、じわりと身体の内側から広がってきた。頬が熱い。だけど、それだけじゃなくて、身体のもっと深いところ——あの夜のことを、勝手に思い出してしまう。

（い、いつシグルド様が戻ってくるかわからないし……）

でも、少しだけ。少しだけなら——。今は、この熱を少しでも慰めたい。

シグルド様の服をぎゅっと抱きしめたまま、私はスカートの中にそつと手を

入れた。ショーツ越しに秘豆を見つけ出して、細い指の腹で軽く揺らす。

「……あ♡」

無音の室内に、思ったよりも大きく、ぐちゅり♡ と水音が響いてしまつて、身体がぶわつと熱くなる。

（私、いつの間にこんな濡れて……♡ うう、もっと……♡）

頭ではもうやめておいた方がいいとわかっているはずなのに、私の指はちつとも止まってくれなかった。

シグルド様がいつも太くて逞しい指でしてくれるそれを、自分の細い指でなんとか再現しようとする。指の腹でくるくる、と秘豆の輪郭をなぞったり、そのままくつと軽く押し潰してみたりしてみた。だけど、どこか物足りない。

「……ふ、う♡ んん、あ……♡」

（シグルド様……♡♡ シグルド様……♡♡ ああ、どうしてシグルド様の指のと

きとはこんなに違うんだろう……♡ 自分でしてても……ッ、お腹の奥が切なくて……♡)

次第にショーツ越しでは我慢できなくなってしまうて、ショーツを横にずらして、直接クリトリスに触れてみる。秘豆はすでに真っ赤に勃起していて、男の指を求めて切なげにひくひく♡ と脈打つ。

おまんこから溢れる蜜を掬って、下から上へとクリトリスに塗りたいくるように撫で上げる。

「んん……ッ♡ あ、あ♡」

(あー……♡ シグルド様にクリトリスぐりぐりって押し潰してほしい……♡ それで……おまんこの穴ほじるみたいに、奥までべろべろ♡ って舌で舐めてほしい……♡)

自分で触っていても、身体はちつとも慰められない。それどころか、むしろ彼

との情事を思い出してしまつて、身体の疼きはさらに高まつていつてしまつた。

必死に指を動かしていると、次第にほんの少しだけ緩い絶頂の芽が奥から芽生えるのがわかつた。それを必死に追いかけながら、彼の顔を思い浮かべる。

「あ、あ♡ シグルド様……、イク……♡ ああ……、イク……♡う♡」

「ミラ、ダメじゃないか」

「え……？」

聞こえるはずのないその声に、心臓がひゅつと縮こまる。後ろから大きな影が差して、洗濯物から漂っていたのとは違う、熱を帯びたシグルド様の匂いが鼻腔をくすぐる。あ、と思った時には、洗濯物をひよいと取り上げられてしまった。

腰をぐいつと抱き寄せられて、クリトリスをいじっていた手が、大きい手に包

まれる。愛液が指から滴り落ちる前に、シグルド様の温かな舌で舐め取られた。

「……ちゅば♡ ただいま、ミラ」

「し、ぐるど様……」

それ以上は、何も言えなかった。あまりの羞恥に、今すぐにでも逃げ出したかった。けれど、私の腰に添えられた彼の手は、私を逃すつもりなど全くなさそう。

（やだ、やだ……！ 見られちゃった……！！ シグルド様の服でオナニーしてるところ、見られた……!!）

「気持ちよかったか？ 俺の部屋で、俺の服の匂いを嗅ぎながらするオナニーは」

「ひう……♡」

耳元で、低く甘い声で囁かれて、いきかけていた身体がびくり♡ と大きく震えた。腰に回っていたシグルド様の手がするりと下腹部に降りていき、すっかり捲れ上がったスカートの中に入り込んでくる。そのまま濡れ具合を確かめるように、緩く直接おまんこの筋をつー……♡ と撫でられて、それだけの刺激で身体に甘い痺れが駆け抜けた。

「ぐっしょぐしょだな……♡ 昼間は途中で邪魔が入ったからな……、だけど俺に黙ってするなんてひどいじゃないか」

——ぐりいッ♡

「あううううッ♡♡」

勃起してすっかり皮が剥けてしまったクリトリスの中心を、叱りつけるように親指の腹で押しつぶされた瞬間、ビクビクビク♡ と全身が痙攣する。

（ああ、イッてるうッ♡ シグルド様の指……♡ 太くて力強くて……♡

おまんこ喜んでるッ♡ もつと押し潰してほしいッ♡)

「う……ッ♡ あ、ふ……ッ、んう♡」

ずっと求めていたものに触れられた身体は、恥なんて忘れてしまったかのよう
に、さらにグッ♡ グッ♡ ととろとろになった秘部をシグルド様の指に押し
付ける。

「あー……、そんないやらしくよがつて……♡ なあ、ミラ」

シグルド様の声も、甘く熱を帯びていく。私の痴態に興奮してくれているよ
うで、ぞくぞくと頭が痺れる。顎を掬われ、唇を塞がれて——昼間ぶりのキス
に、私も夢中になって舌を絡めた。

「ん……ッ♡ ふ、あ……ッ♡ んんッ、んむう……ッ♡ ちゅぽ……ッ♡」

キスに夢中になっていると、腰のあたりに硬い何かが押し付けられる感覚があ
った。それがシグルド様の屹立だと理解した瞬間、全身が心臓になったみた

いに、大きくどくん♡ と脈打った。

(足りない……ッ、足りない……ッ♡ キスだけじゃ……♡ もっと、もっと深い魔力、濃い魔力を……ッ♡)

そこまで考えた瞬間、私はたと気づく。

(ちよつと待つて。私、もしかして……?)

「そろそろだと思ったんだ。俺のちんぽ、欲しくて仕方ないだろう？」

「し、ぐるど様……、わたし……♡」

「俺の魔力量はミラの比じゃない。それだけ差があれば、いくらミラが一方的に流し込んでいたつもりでも……どこかで逆流するのは、まあ、当然だろうな」

つまり——ずっとシグルド様の呪いを解こうとしていた私の中に、気づかないうちにシグルド様の魔力が溜まっていた、ということだった。私の魔力量では、受け止めきれないほどの量が。

（……最近身体の奥が疼いて仕方なかったのも、シグルド様の魔力が逆流して
いたから……？）

「お前も知らないわけではないだろう？ 自分の中に入り込んだ他人の魔力を
中和するための方法」

「そ、それは……」

その言葉に、下腹部がひとりでにきゅううッ♡ と切なく戦慄いた。そう、
私の身体はもう、どうすればいいのか知っている。——そう、魔力がふんだん
に含まれた精液を、熱く昂る下腹部に注入すればよい。

「さあミラ、セックスしようか」

（私と、シグルド様が……。セックス……）

聖女の落ちこぼれで、ただのお世話係の私が、この国最強の騎士団長と、
セックス。夜毎あんなことをしておきながら、それでも自分を納得させること

ができたのは、それがシグルド様の呪いを解くためだったからだ。

(だけど……)

「……何を迷ってるんだ？ ミラはずっと俺の呪いを解くために頑張ってくれていたんだ。ほら、俺の刻印だつてこんなに薄くなってきた。だからこそ、今度は俺がミラを助けたいんだ。それじゃあ、ダメか？」

(……ずるい、わ)

シグルド様は、私の目の前に極上の言い訳を用意してしまった。

身体の内がじくじくと疼いている。これが魔力の乱れのせいなのか、それともシグルド様のことが欲しいという、私自身の気持ちのせいなのか、もうわからなかった。

——だけど、今はわからなくてもいいと思った。私は返事の代わりに、シグルド様の太い首にそつと腕を絡ませた。

シグルド様のベッドにそつと降ろされる。心臓が喉元まで迫り上がってくるような感覚がして、うまく息が吸えない。目の前には、私に覆い被さるシグルド様。こんな光景を、何度も見てきた。だけど、何度肌を重ねても、慣れることはない。シグルド様のエメラルド色の美しい瞳が、私を射抜いた。

「ミラ……」

シグルド様の形の良い唇が近づいてくる。何度も受け入れてきたけれど、それはあくまでも彼の呪いの浄化のためという大義名分があった。

（だけど、今日は……。ああ、本当にいいのかしら）

私のそんな逡巡は、彼とのキスで一瞬のうちに消されていく。柔らかな唇を啄むようにちゅ、ちゅと触れ合わせたかと思うと、彼の舌がわずかに開い

た私の唇を割って、ぬるりとした舌が口内に入り込んできた。私は気づけば彼の金色の髪の中に指を差し入れ、私からも彼の舌を追いつめて絡め合わせていた。

「ん……、ふ、う……ッ♡ は、あ……ッ♡」

身体が、燃えるように熱かった。子宮の奥がじくじくと疼いて、秘部からいやらしい蜜がとめどなく溢れる。

彼の熱い指が、私のリボンを解いていく。すぐに下着までするりと取り払われて、外気に触れた肌が切なげに粟立った。

「綺麗だ……」

熱い吐息混じりにシグルド様が呟くと、彼は上半身を起こして、自らの服を乱暴に脱ぎ捨てて。いつもは上半身しか脱がなかったシグルド様が、パンツごとズボンも脱ぎ捨てていく。はたしなないとは思いつながらも熱に浮かされた私の

視線は彼の股間に釘付けになってしまう。

(お、つきい……♡)

シグルド様のそれは、あまりにも凶悪だった。腹につくくらいそり返って、血管がびきびきと浮かび上がっている。鈴口からは透明な先走りがぷつくりと溢れ出て、シグルド様が男根を扱くと、とろお……ッ♡ と私の恥丘に滴った。

こんなの絶対に挿入らないと思うのに、私のおまんこは早く男根を飲み込みたいと言わんばかりに、愛液をとろり……♡ とこぼす。

シグルド様が私に覆い被さる。ぷつくりとした亀頭の先っぽが、膣口に当てがわれた。

(あつつい……♡)

そのまま愛液を纏わせるように上下におちんちんを揺らされると、それだけ

で膣が期待するように収縮したのがわかった。

シグルド様が私の顔を覗き込んで、ふっと表情を和らげた。安心させようとしてくれているのだろうか。優しくぽんぽん、と頭を撫でられて、なんだか目頭が熱くなってくる。嬉しいのか、怖いのか、恥ずかしいのか——自分でもわからなくて、泣きそうだった。

「ミラ、挿れるぞ」

「あ、シグルド様ッ♡ わたし……ッ、心の準備が、あ……ッ♡ まっ、あ……ッ♡ きやうううッ♡」

ぐ。ぶ。ぶ。ぶ。……ッ♡

（あつついッ♡ おつきい、よお……ッ♡ こんなッ、はいんな、ああ……ッ♡♡♡）

熱くて、大きくて、硬い。男性のそれを受け入れるのは初めてことだった。

だけど、こんなの無理だと思う私とは裏腹に、蕩けきったおまんこはシグルド様の巨大な肉棒を易々と飲み込んでいく。

「ああ……ッ♡ しぐるど、さまぁッ♡ もうはいんないッ♡ んぁぁッ♡」

「こら、逃げないでくれ。まだ半分も入ってない。ミラのまんこはちゃんとちんぽを受け入れてるぞ。ヒダがうねって……、ちゃんと飲み込んでる」

大きすぎるシグルド様の男根に、息が詰まる。

逃げようと腰を浮かせても、シグルド様の剛腕に押さえ込まれて逃げられない。恐怖と期待が混ざり合った吐息が、震える唇から零れ落ちた。

初めてのことにいっぱいいいっぱいになっている私へ、シグルド様の手がクリトリスに伸びてくる。

「アッ♡ 今クリ触らないでえッ♡ ひ、うゝ……ッ、しこしこやだぁッ♡」

くりくりくりくりッ♡ しこしこしこしこッ♡

クリトリスの皮ごと根本から親指と人差し指で摘まれて、そのままおちんちんを抜くみたいにしこしこ♡ と揺らされる。その刺激におまんこの奥からどばどば♡ と蜜が溢れ出して、膣壁がほんの少しだけ緩む。シングル様はその隙を見逃さずに、おちんちんを一気に最奥まで突き入れた。

ぐ。ふ。ふ。ふ。ふ。……ッ♡ ——ごッちゅんッ♡♡

「……ッッ!?♡ おおッ♡♡」

目の前が真っ白になって、火花がばあん♡ と弾けた。全身が痙攣して、足先までピン♡ と伸びてしまう。

「……くッ、締め付けすごいな。あー……、目え上向してる♡ 初めてちんぽ突っ込んでポルチオイキできるなんてなあ♡ ミラはいい子だな♡」

「お。く。く。く。……ッ♡ あうづッ♡ おぐ、う……ッ♡ ぐりぐりじないでえッ♡」